

ハンドボールのまち氷見は今後どうなっていくのか

－部活動地域移行に着目して－

坊 百花 (新潟大学)

1. 目的

現在、学校部活動の地域移行が進められている。都市部と比べて人口減少や財政難に直面する地方では、受け皿となる組織や資源が不足し、その実現が困難な状況も見受けられる。本研究では「ハンドボール」を核としたまちづくりを推進する富山県氷見市に着目し、その取り組みが地域社会に及ぼす影響を多角的に考察することを目的とした。

2. 方法

(1) 文献調査: 富山県氷見市におけるハンドボールの歴史や現状、部活動改革に伴う課題等について新聞記事や広報などの資料を用いて検討した。

(2) 聞き取り調査: 氷見市スポーツ協会2名、氷見市教育委員会スポーツ振興課職員1名(元中学校教員・ハンドボール部顧問)に対し、半構造化インタビューを実施した。

3. 結果と考察

1) 春中ハンド・応援サポーター制度

氷見市では、2004(平16)年発表の「地域スポーツ拠点づくり推進事業」(財団法人地域活性化センター)を契機とし、2006(平18)年より「春中ハンド」を開催している。この大会の特徴の1つに「応援サポーター制度」がある。この制度は市内の各地区に応援する都道府県を割り当て、大会運営のサポートや応援、観光案内などを行うものである。毎年、高齢者を中心に300人以上が参加し、市民と選手・保護者の交流が生まれている。これにより、市民がスポーツと関わる機会が増えるとともに、運営スタッフ不足の解消や地域活性化にも好影響を与えている。

2) 実業団チーム「富山ドリームズ」の創設

ハンドボール選手が地元で競技を続けながら働ける場として「デュアルキャリア」形式の実業団

チーム「富山ドリームズ」が創設された。選手は日中、地元企業に勤務し、夜間や休日にハンドボール選手として活動する。選手は競技を続けながら引退後のキャリアを確保できる一方、地元企業は若い人材を確保することができる。さらに、選手が指導者として地域に貢献することで、ハンドボールの専門的な知識・技能を持つ人材が定着し、持続可能な育成サイクルが形成されている。地方が直面する「若者の人口流出」や、選手が抱える「スポーツ経験を活かす場の不足」といった課題の解決に寄与し、地域に好循環を生み出している。

3) ゆるスポーツ「ハンぎょボール」

氷見市は、ハンドボールと地元特産のブリを融合させたユニークな“ゆるスポーツ”「ハンぎょボール」を開発した。ルールには氷見市の方言や「ブリの出世」など地域色が取り入れられている。親子活動や学校、地域イベントなどで広く活用され、県内外でも注目を集めている。「ハンぎょボール」はスポーツ参加のハードルを下げ、幅広い世代が共にスポーツを楽しむ手段の一つとなっている。

4. 結論

本研究は、富山県氷見市のハンドボールを核としたまちづくりに着目した。様々な取り組みによって住民が主体的にスポーツに関わる仕組みを構築し、「ハンドボールのまち・氷見」を多世代へ広く浸透させることに成功している。今後、氷見市においても部活動の地域移行が進められるが、これまでの取り組みの蓄積が部活動改革の基盤となり、地域全体の発展に寄与するものと考えられる。

<参考文献>

- 1) 岩間英明(2024) 運動部活動の地域移行における現状とその課題, 松本大学研究紀要, 22, pp. 1-15